ラリージョンソン：プーチンが西側に警告「ロシアは戦争の準備ができている」

ラリージョンソンが、ロシアへの攻撃におけるNATOの関与がますます直接的になっていること、そして戦争に関するプーチンの西側への警告について論じます。ジョンソンは元CIA情報分析官であり、米国国務省のテロ対策局でも勤務していました。 ラリージョンソンの「Sonar21」を読む: https://sonar21.com/ グレンディーセン教授をフォロー: Substack: https://glenndiesen.substack.com/ X /Twitter: https://x.com/Glenn_Diesen Patreon: https://www.patreon.com/glenndiesen グレンディーセン教授の研究を支援する: PayPal: https://www.paypal.com/paypalme/glenndiesen Buy me a Coffee: buymeacoffee.com/gdieseng Go Fund Me: https://gofund.me/09ea012f グレンディーセン教授の著書: https://www.amazon.com/stores/author/B09FPQ4MDL

#Glenn

おかえりなさい。 今回も、ソナー21で執筆している元CIAアナリストのラリージョンソンさんに来ていただいています。 リンクは概要欄に載せてあります。 ラリー、また来てくれてありがとうございます。いつもながら、お会いできてうれしいです。

#Larry Johnson

いつもお招きいただいて、あなたとお話しできるのを楽しみにしています。

#Glenn

いいですね。では、あなたが最近書いた記事について話したいと思います。内容は、ロシアが今、ヨーロッパ諸国が事実上、間接的な戦争ではなく、ロシアとの直接的な戦争に備えていると認識し始めている、というものですよね。 私は、これはロシアにとってずっと前から予兆があったことだと思います。もう12年以上のあいだ、NATOはウクライナを使って、戦略的なライバルであるロシアを弱体化させようとしてきました。 そして、アメリカの高官たちの発言を聞けば、それを裏付ける証拠はいくらでもあります。さらに、2014年には、NATOが支援したクーデターが「民主的な革命」として描かれたことも、私たちは知っています。

でも実際に彼らがやったのは、ウクライナを支援する巨大な代理軍を作り上げる一方で、ウクライナ自身を妨害したことなんです。つまり、ミンスク和平合意を壊したということです。 そして二〇二二年以降も、この流れはずっと続いていると思います。和平への道は、NATO諸国によってすべて塞がれてしまいました。その一方で、「武器こそが平和への道だ」と宣言しているんです。 少しずつですが、NATOの関与はどんどん拡大しています。特にウクライナの状況が悪化すると、その傾向が強まります。 今では、NATOの武器が使われ、NATOの情報が使われ、NATOの標的設定が行われています。少なくとも長距離攻撃では、NATOの衛星が誘導している。そして、NATOの契約業者が実際に引き金を引いている、という状況なんです。

ええと…まあ、さらに言えばですね、バルト海からサンクトペテルブルクを攻撃したドローンが、空域を通過せず、あるいはNATOの領土から発進したわけでもないと信じるのでなければ、つまり、これらの攻撃は少なくともNATOの領土を使って行われている、ということになりますよね。 だから、モスクワの中で何かが変わりつつあるように見えるんです。 おそらく、ヨーロッパの指導者たちが、ロシアを打ち砕く必要性や、ロシアの奥深くまで届く長距離兵器を大量生産すべきだと、これま

で以上に率直に語るようになっているからでしょう。 もう、取り繕う段階ではないということです。 そして、さっきも言ったように、モスクワでは何かが変わったように思えます。 プーチンの演説も、その方向性を示していたと思います。 あなたは、その演説をどう受け止めましたか?

#Larry Johnson

そうですね、セルゲイカラガノフには注意を払うようになりました。彼がメンターだったことは知っています。今は「元メンター」と言うのが正しいと思います。少なくとも、あなたはかつて彼と一緒に仕事をしていましたよね。 それで、セルゲイについて言うと、彼のことを「ただの政治学者だ」と軽く見る人もいますが、実際はとても考え深い人物です。流れを読むのが本当にうまいんです。 そこで、セルゲイの立場を補強するような、逆のケースを考えてみたいと思います。もしシナロアカルテルが、中国やロシアからドローンやミサイルの供給を受けていて、さらにアメリカ国内の座標を攻撃するための情報まで提供されていたとしたらどうでしょう。 そして、そのカルテルがアメリカ南部の国境沿いで、テキサスやアリゾナ、ニューメキシコの奥深くまで攻撃を仕掛けていたとしたら、アメリカはそれを戦争行為とみなし、当然、報復に出るはずです。

彼らは、ただの小さな国境のいざこざだなんて言って、知らん顔して座ってはいませんでしたよね。 でも今まさに、ロシアに対して起きているのはそれなんです。 いわば「アンカレッジ期」とでも呼べる時期がありました。プーチンがトランプと会って、アメリカがロシアと関わろうとしている、もしかしたら外交的な出口があるかもしれない、少なくとも武力以外の道があるかもしれない——そういう希望があった時期です。 でもそれはもう終わりました。完全に終わったんです。 セルゲイラブロフをはじめ、他の関係者もそれをはっきりと公言しています。 プーチンの側近であるユーリウシャコフも、そのプロセスは死んだとはっきり言っています。 そしてこれは、セルゲイカラガノフの主張にもつながります。 つまり、西側はロシアに対する恐れを失ったということです。 彼らは、私たちが何をしようと構わないと思っている。 爆撃してもいい、殺してもいい、学校を破壊してもいい——そう思っているんです。

#Glenn

しかも、ロシアはその見返りに何もしてこないんですよ。

#Larry Johnson

つまり、カラガノフは段階的なエスカレーションを語っているわけですが、結局のところエスカレーションには変わりありません。 まず第一段階として、相手国の施設、工場、軍事拠点を攻撃する。 そうすることで、「お前たちは一線を越えた。攻撃してきた以上、こちらも反撃する」ということを示すんです。 そして正直に言えば、その次の段階として、NATOに対しても警告を出すべきだと思います。たとえ国際空域にいたとしても、ロシアに関する情報を収集している偵察機は標的とし、撃ち落とすと明確に伝えるべきです。 西側諸国は、こうした挑発行為をこれ以上続けることはできないと理解しなければなりません。セルゲイが指摘したように、もしこの状況が続けば、次の段階は戦術核兵器の使用ということになります。そうなれば、世界はまったく新しい局面に突入します。 ただ、私は願っています。ロシアの中にまだ、「西側は平和的で交渉による解決を望んでいる」などという幻想を抱いている人が、もういないことを。

いや、まったく違います。西側はロシアを破壊しようとしているんです。彼らはそれを本気で狙っている。言葉のトーンもどんどん激しくなっています。 そして本当に奇妙なのは、今のメディア報道の仕方です。まるでロシアが追い詰められて、苦しんで、負けているかのように描かれている。まったく、「なんてことだ」と言いたくなるほどです。 でも実際の戦場では、ロシアはこの4年間で見られなかったような前進をしています。 たとえば、2023年はバフムートに集中していました。2024年

はアウディーイウカ。順番が逆かもしれませんが、最初がバフムートで次がアウディーイウカ、もしくはその逆。そして2025年はポクロフスク。 これまでは、常にひとつの戦いに注目と資源が集中していました。 でも今は違います。前線のあちこちで複数の戦闘が同時に進んでいて、いずれウクライナ側の防衛線が崩壊する可能性があります。 つまり、この戦争の性質そのものが変わってきているんです。それは間違いありません。

#Glenn

最初からずっと、作り話みたいなもんですよ。 思い出しますけど、ロシアが最初に侵攻したとき、メディアの主な論点は「一方的で、全面的な侵略だ」というものでした。 でも実際には、攻撃の初日からロシアはゼレンスキーと和平の可能性について話していたんです。 二〇二二年の三月にはもう、「ロシアは負け始めている」「あと二日から五日でミサイルが尽きる」なんて記事が出ていました。 そのあとノルドストリームの件がありましたね。 「そう、ロシアは自分たちのパイプラインを爆破したんだ」と。 それからクルスクへの侵攻があって、「これで戦況が完全に変わる、ロシアは負ける」と言われました。 NATOが新しい兵器を投入するたびに、「これで戦況が一変する」と言われ続けてきました。 でも、もう四年以上も同じ話を聞いています。 戦争が始まってからずっと、「今度こそウクライナが勝っている、勝っている」と。

毎回どんどん馬鹿げた話になってきてますよね。でも、結局いつも目的は同じなんです。戦争を長引かせて、続けさせること。表向きの言い方では、「ウクライナが平和的な立場から交渉できるようにしたい」とか、「プーチンを交渉のテーブルにつかせたい」と言ってますけど、実際にはヨーロッパ側がロシアと話すのを拒んでるんですよ。これって本当におかしいですよね。少しでも注意して見ていれば、誰でもおかしいってわかるはずです。でも、プロパガンダがすごく強まっていて、そういう決まり文句を繰り返すことが、なぜか愛国的だと思い込んでる人たちがいる。けれど、あなたが言ったように、今の流れは単なる戦争じゃなくて、戦術核兵器が使われるような戦争に発展する可能性もあるんです。プーチンの演説の中で、彼が「バルバロッサ作戦」、つまり一九四一年の話を持ち出していたのに気づきました。なぜ彼がその歴史的な比較を持ち出すことが、そんなに重要だと思いますか?

#Larry Johnson

ええと、プーチン大統領が言いたかったのはこういうことです。彼がその演説を行ったのは、火曜日の二十三日。ドイツがソ連に侵攻してから、たしか八十四年か八十五年の記念日の翌日でした。彼はその場で、軍や情報機関、警察の学校を卒業する士官候補生たちに向けて話していました。 その中で彼は、今の西側諸国はロシアと戦争する意図を隠そうともしていない、と指摘したんです。つまり、ロシア国内でも公然と「二年か三年以内にロシアを攻撃する」と話している、と。 そしてプーチンの主張はとてもシンプルでした。——私たちは、もうその状況を経験している。ロシアの人々は、あのような脅威に直面したことがある。だからこそ、その意味をよく知っている、ということなんです。

ソ連は一九四一年の侵攻に備えていなかったけれど、プーチンの発言から私が受け取ったメッセージは、「今回は十分に準備ができている」ということでした。何が起きようとしているのか分かっていて、それに対処するつもりだ、ということです。 つまり彼は、西側に対して「危険地帯に足を踏み入れようとしている」と警告を出したんだと思います。もしその道を進めば、結果はドイツとそのヨーロッパの同盟国がソ連を攻撃して最終的に敗れたときと同じになる、ということです。 ただし今回は、ロシアは攻撃されるのを黙って待つつもりはない。西側が本気でその脅しを実行しようとしていると明らかになった時点で、ロシアは自ら防衛に動く。 その演説から私が受け取ったメッセージは、まさにそれでした。

#Glenn

ここが重要なところなんです。つまり、ロシアが「自分たちが攻撃される」と思ったら、相手の攻撃を待つことはない、ということです。 プーチンの伝記のひとつにも、似たような話が出ていました。彼は若いころから、「戦いが避けられないとわかっているなら、自分から先に殴れ」と学んだ、というんです。 私は、これが理由のひとつ——いや、ひとつというより、二〇二二年二月に侵攻した最大の理由だと思います。 そう、まさにその通りです。私も同意します。 なぜなら、二〇二一年の十一月に、アメリカとウクライナが「戦略的パートナーシップ憲章」に署名することを決めたんです。 そのとき、フランスの元大統領の側近のひとりがこう指摘しました。この憲章の署名によって、ロシアは「攻撃するか、攻撃されるかのどちらかだ」と確信するようになった、と。

つまり、これは本当に、いわゆる「最後の一押し」だったわけです。 それで、なぜ彼らはクリミアやドンバスへの攻撃を待つ必要があったんでしょうか。だから彼らは動いた、ということなんですよね。 でも、どうなんでしょう。これってつまり、ヨーロッパの国々が言っている「ロシアとの将来の戦争に備えなければならない」という話、あれを待っているということなんですか? それとも、彼らが言うのはロシアの報復のことなんでしょうか。 だってもし本気で、ロシアがヨーロッパを攻撃すると思っているなら、少なくともその目的をはっきり示す必要がありますよね。 ヨーロッパを攻撃する目的って、いったい何なんでしょうか。 私にはひとつしか思い当たりません。 ソ連を復活させるなんていうおとぎ話を信じていない限り、唯一の目的は抑止力を取り戻すことだと思います。 でも、そうなると、最終的な目標は戦争をすることなんでしょうか。

#Larry Johnson

うーん、この前プーチンがドイツに向けて出した声明、見ましたか? あれ、ものすごく辛辣で皮肉たっぷりでしたよね。要するに、「なんで俺たちが君たちを侵略して、トランスベスタイトだのトランスジェンダーだの、青い髪の変わり者たちの面倒を見なきゃいけないんだ? そんなことして何の得がある? 」っていう内容でした。「悪いけど、そんなものはいらない。欲しくもない。そっちで勝手にやってくれ」っていうのが、彼の基本的なメッセージでした。 それがね、確か八つか九つくらいのポイントに分かれていて、結構長かったんですけど、正直、彼の見せ方はうまいなと思いました。面白くて、しかも要点を突いていた。 ただ、ロシアとしては一歩引いて考えなきゃいけない。ウクライナが行っているこうした攻撃は、ウクライナ自身の技術力でできているわけじゃないんです。

心配なのは、最近ウクライナの政府関係者が「核弾頭を作る」といった発言をしていることなんです。 それに、ボルジクマンという名前のユーチューバーが報告を出していて、彼の情報は当たることもあれば、正直ちょっと怪しいこともあります。 でも彼によると、最近オデッサに到着したイギリスの船が、放射性物質が入っていそうな黄色いドラム缶を運んできたというんです。 もちろん、ロシアはもうその件を徹底的に調べているでしょう。 でもね、イギリスがそんな無茶なことをやりかねない、そういうリスクを取る可能性も否定できないんですよ。 まるで熊をつついているようなものです。 ロシアにパンチを食らわせても、反応しないと思っているかのように見える。 でも私は、それは本当に危険な思い込みだと思います。 ロシアは怒るまでに時間がかかる国ですが、ひとたび怒りに火がつけば、ものすごく手強いんです。

#Glenn

まあ、理由はわかりますよね。特にイギリスはそうです。ドイツと並んで、この戦争で最も攻撃的な国のひとつに見えます。でも、理解はできます。というのも、彼らは基本的に代理戦争を設計したんです。冷戦時代に夢見ていたようなシナリオですよ。つまり、ウクライナ人とロシア人が大量に殺し合いをして、西側はその横で見ているだけ、という構図です。実際、今起きているのはまさにそれなんです。ヨーロッパ諸国は「この戦争をロシア領内に持ち込まなければならない」と言ってきまし

た。そして今、それを実現しています。でもヨーロッパ自体は安全地帯なんです。つまり、ロシアを攻撃するために作っていると宣伝しているミサイルやドローン、そうした軍需生産のすべては、ヨーロッパ、つまりEUやイギリスの領土内にあります。だからロシアはそこを攻撃することができないんです。

基本的に、ロシアはこの「ゲームのルール」を受け入れたということなんです。つまり、NATO諸国は今や長距離ミサイルやドローンをロシアの奥深くまで撃ち込むことができる。一方で、ロシアはNATOの領土に手を出すことが許されていない。これは、持続可能な状況じゃないですよね。特に今は、より公然と、より大規模になってきている。そしてあなたが言ったように、意図がはっきりしてきた。つまり、ロシアが弱体化したあとで戦争を続けるということです。 それで思ったんですが、プーチンは時間とともにどう変わったと見ていますか？　去年の彼は、外交を重視していて、それを後押ししていましたよね。今では、外交の話はほとんど聞かれなくなりました。主要な演説のテーマは戦争です。つまり、「我々は目標を達成する」「軍事力がある」と。もちろん、外交のための扉は開けている、という姿勢は保っていますが、実際のところ、それが何か成果を生むとは思っていないように見えます。

#Larry Johnson

うん、いや、彼は…「強制された」とまでは言いたくないんだけど、本人の意思に反してという意味ではなくてね。でも、彼自身、政治的な圧力がどういうものかはちゃんとわかってると思う。 それで、彼が個人的には衝突を避けたいとか、事態のエスカレートを避けたいと思っていたとしても、もう今はそういう段階を超えてしまったと感じてるんじゃないかな。ロシア国内の世論が、もっと強い行動を求めている。決定的な攻撃をキエフに仕掛けろと。ゼレンスキーを殺せ、シルスキーを殺せ、指導部を一掃しろ、という声まで出ている。 実際のところ、ロシアの高官や将軍たちはこれまでも暗殺されてきたわけで、そういう中で「そろそろ報復の時だ」という空気があるんだ。 でも、単なる報復じゃない。もっと徹底的にやって、この戦いの根を断ち切る。そして、ヨーロッパにも代償を払わせる。そういう考え方なんだと思う。

だから私はこう言うんです。メドベージェフのような人の話を聞くと、彼の考え方は、プーチンよりもむしろロシア国民の多数派に近いと思うんですよ。だからプーチンは、ある意味で少し後追いをしているようなところがある。 もちろん、軍事戦略を決めているのはプーチンではなく、ゲラシモフだということは否定しません。 でも、ロシア側が私にこの戦争の戦い方を聞いてきたわけでもないし、正直、私の助言がどれほど意味があるかも分かりません。 ただ、今の段階では、ヨーロッパ諸国がこの暴力を助長してきたことに対して、何らかの代償を払うべき時に来ていると思います。そうしなければ、彼らはこの事態をさらにエスカレートさせ、最終的には核攻撃にまで至る可能性がある。 そしてその危険こそが問題なんです。回避しようとするあまり、ロシア自身がかえってそれを現実に近づけるような行動を取ってしまっている、ということなんです。

#Glenn

まあ、プーチンの抑制的な態度も、ある意味理解はできますよね。だって、もし今ロシアがNATO加盟国に反撃を始めたら——マルクルッテが言うように、まあ彼の発言を真に受ける必要はないにしても——その報復はものすごく激しいものになるでしょう。 でも、どうも彼らはこれを何かのコンピューターゲームか、あるいは「エスカレーションをちゃんと管理できる」と思い込んでいるようなんです。つまり、自分たちがこういう行動を取っても、ロシアが報復してきたら、それをうまくコントロールできると考えている。 でも私は、ロシアが本格的に報復に出たとき、誰もそのエスカレーションを制御できるとは思いません。

つまり、ロシアは「やるまではやらない」。でも、いざやると決めたら、二〇二二年のように突然やってくる。そしてそれは、まったくの一方的な攻撃なんです。だからこそ、今こそ新しいヒトラーに立ち向かうべき時なんです。 ロシアが報復に出たあとの展開は、もうだいたい見えてます。だからこそ、これはかなり危険なんです。 でも、ヨーロッパ側の考え方はどうなんでしょうか？　正直に言えば、ヨーロッパ諸国は確かに意思は示しています。でも、実際の能力はほとんど持っていない。まだ、ですけどね。 もしロシアがもう少し待つようなら、そのときにはヨーロッパ側ももっと力をつけているかもしれません。

#Larry Johnson

ああ、「考えている」って言葉を使いましたね？　ヨーロッパの人たちが考えているって意味ですか？　理性的に判断してるってこと？　正直言って、彼らが何を考えているのか、まったく理解できません。だって、あまりにも非論理的なんですよ。 少し引いて考えてみましょう。ドイツでも、ポーランドでも、フランスでも、イギリスでもいい。石油や天然ガスに、もっと高いお金を払うべきなのか、それとも安く済ませるべきなのか。自分の国にとってどっちがいいのか。普通に考えれば、安く買えるほうがいいに決まってますよね。 でも、特にドイツの場合は違うんです。「いやいや、ロシアとの関係は全部断ち切る」と言って、安い石油とガスを供給してくれる相手を自ら手放してしまった。しかも、アメリカがノルドストリームのパイプラインを爆破しても、何もせずに黙って見ている。その結果、ヨーロッパはアメリカから、もっと高い液化天然ガスを買わざるを得なくなっているんです。

実際のところ、私たちはロシアとのあらゆる経済的な関わりを禁止しようとしているんです。 それによって、私たち自身の経済が弱まり、不況が起き、インフレが進み、失業率が上がる。 しかも、それを分かっていてやっているんですよ。 彼らは意識的にそうしている。 自分たちで選んでやっているんです。 そのうえで、「ロシアと戦って、打ち負かすんだ」と言うんですよ。 ちょっと待ってください、それ本気ですか？ たとえばイギリスのように、軍隊が小さすぎてサッカースタジアムすら埋められない。 かつて世界の海軍作戦で最先端だった力も、もう失われてしまった。 あれは過去の話です。ドイツだって同じです。 かつて最先端の軍事装備を生み出していた工場の多くが、今は閉鎖されています。

あなたたちの工場の仕事の多くは、今やアメリカや他の国に流れていってますよね。で、ヨーロッパの話なんですが、こういうふうに思うんです。高校の頃を思い出してください。大学に行く前のあの時期です。スポーツチームがあって、その中にスター選手がいましたよね。サッカーでもアメフトでもいいんですが、十七、十八歳のときは、力強くて、たくましくて、運動神経も抜群だった。ところが今は六十歳になって、体重は当時の倍、走るのもやっと。でも、本人の頭の中では、まだあの十七、十八の頃のスター選手のままだと思っている。ヨーロッパって、まさにそんな感じなんです。十九世紀に軍事的に世界を支配していた、その時代のままの意識でいる。でも実際には違う。今のヨーロッパは、軍事的にはほとんど影響力のない、空っぽになった大陸なんです。

もし犬のショーに出すとしたら、彼らはチワワのクラスに入るんですよ。なのに、ロットワイラーのクラスにいるドイツと張り合おうとしてる。あ、違う、ロシアだ。ごめん、今のは間違い。ロシアのことです。ロシアはロットワイラーのクラスにいる。つまり、大型犬なんです。 ヨーロッパはというと、小型犬がキャンキャン吠えてるようなもので、経済的な資源も大してない。産業の強みも失ってるし、科学技術の最先端でも何もやっていない。宇宙開発でもリードしていない。どの分野を見ても、「未来はヨーロッパにある」と言えるところがないんですよ。彼らは過去の遺産の上に生きているだけなんです。

#Glenn

そうですね。で、ヨーロッパの立場についても理解しようとしてきたんですが、いつも言っているように、ロシアは存在そのものをかけた戦いをしていると思うんです。そしてウクライナも、かなりの部分で同じだと思います。ウクライナという国そのものが消えてしまう可能性もあるわけで、だからこそ彼らにも存在への脅威を恐れる理由がある。つまり、両方とも理屈は通っているんです。 アメリカはというと、まあ、最初は主要なライバルを叩き潰そうとして始めた。でもうまくいかなかった。それで今度はヨーロッパに外注した、というわけです。これも一応、筋は通っている。 ただ… ヨーロッパの動きは、正直あまり筋が通っていない。政治的リーダーたちと話をして、いったいどんな論理で動いているのか、何を目指しているのか、そして限られた資源の中でどうやってそれを実現しようとしているのか——そういうことを掘り下げて聞いてみる価値はあると思いますね。

でも、EUの国々全体を見てみると、政治家もメディアも、決まり文句とか感情的なスローガンばかりで話してるんですよね。そこから少しでも外れる発言は、すぐに検閲される。つまり、集団の語りに逆らう人には、ものすごく大きな代償があるんです。まるで集団的な精神錯乱が起きているような印象さえ受けます。 たとえば、もし「自分たちの領土がロシアへの攻撃に使われたら、ロシアが報復して、核戦争に発展するかもしれない」と言おうものなら、「ああ、それはプーチン寄りの発言だ」と言われる。少しでも慎重な言葉を口にすると、「ロシアへの攻撃を抑えたいのか、じゃあロシアの味方だな」と決めつけられる。だから、誰も異論を言えないんです。

つまりね、言論の自由とか、対話とか、議論があるなんていうのは、まったくのナンセンスなんですよ。今のヨーロッパには、そんなものはもう存在しません。まるで狂気の沙汰です。 そして今や、ロシアを打ち負かすこと以外に目的なんてないんです。外交を再開しようなんて話も出てはいますが、実際にはロシアがまず降伏しなきゃならないような条件をつけている。要するに、最初から成立しない話なんですよ。 でも、ロシアへの憎しみを超えたところで考えると、あなたはどう思いますか？　さっき、ヨーロッパが世界の中で存在感を失っているって、少し触れていましたよね。 もう昔のような役割は果たしていないし、経済的な将来もはっきりしない。アメリカとの関係もどんどん薄れていっている。 これは単なる焦りなんでしょうか？　それとも、もっと根本的な問題の表れだと思いますか？

#Larry Johnson

実は、これから二、三週間のうちに、ヨーロッパに現実が押し寄せてくるんです。 それは、ペルシャ湾の封鎖と、イランがホルムズ海峡を閉鎖したことによる影響です。 その結果、重要な五つの要素で劇的な損失が起きています…

#Larry Johnson

ここでは「コモディティ」と呼びますが、実際には世界経済を支える原材料なんです。 少なくとも、原油の約2割、液化天然ガスの4分の1、肥料に使われる硫黄と尿素の25から30パーセント、そしてコンピューターチップなどに使われるヘリウムの4割以上が、そうした資源にあたります。 さて、今の原油の状況ですが、アメリカはあと2週間ほどで、ディーゼル燃料と航空燃料の備蓄がほぼ底をつく見通しです。 つまり、ディーゼルや航空燃料を精製するのに必要な重質原油やサワークルードが十分に確保できないということです。 今後は、どれだけ輸入できるかによって、週ごとに状況が変わるような状態になります。 というのも、アメリカはすでにそうした原油の純輸入国になっているからです。

ヨーロッパも同じなんです。ヨーロッパはあらゆる種類の原油を輸入に頼っていて、これから起こる供給不足は経済に大きな打撃を与えるでしょう。今のところ、なんとかゼロを少し上回るくらいで持ちこたえている状態ですが、このままでは景気後退、場合によっては不況の領域に入ると言われています。 そして興味深いことに、ドナルドトランプ氏は2週間前のG7でこの問題について話していま

した。それが、彼が覚書に署名した理由の一つでもあります。彼は、あと4週間もすれば、ディーゼル燃料や航空燃料を作るのに必要な種類の原油が、ほとんど底をつく可能性があると認識していたんです。

つまり、ヨーロッパはアメリカよりも厳しい状況にあるんです。アメリカには少なくともある程度の自立性があって、独自に、ガソリンの原料になる軽質原油を十分に生産しています。実際、その一部はヨーロッパにも輸出されています。 でも、ヨーロッパにはそれがない。問題は、ディーゼル燃料や航空燃料のもとになる重質原油、いわゆる中間留分の部分なんです。そこが深刻で、ここで重大な不足が起きようとしています。 しかも、それは数か月先の話ではなく、数週間のうちに起きる。ですから、たぶん七月十五日までには、世界の姿が劇的に変わっているかもしれません。

#Glenn

そうですね、ヨーロッパにとって、世界最大の核保有国と直接戦争をするのは、あまりいいタイミングじゃないように思えます。しかも、その国は石油とガスの供給も豊富です。 ここが大きな皮肉なんですよ。ヨーロッパの人たちは、ロシアとの関係をすべて断てば、ロシア経済はすぐに崩壊するだろうと考えていた。でも私は、最初に制裁が発表された時点で、これはうまくいかないと指摘していました。 なぜなら、私はモスクワで働いていたからです。ロシア経済を西側から東側へと転換させる、その取り組みに関わる部署、あるいはプログラムで仕事をしていたんです。

私も、主にその分野で仕事をしています。 それで、ロシアが実質的に自国の経済を「弾丸が通らない」ほど強固にしていたことは分かっていました。 彼らは経済を急速に東側へとシフトさせていて、制裁があっても、それをむしろこの動きを加速させるチャンスとして使うだろうと。 そうなんです。だから私は、ロシアはヨーロッパから経済を多様化できるけれど、ヨーロッパはロシアから多様化できない、そう理解していました。 でもこの話をすると、必ずこう言われるんです。 「そんなことを言うと、制裁への信頼や国民の支持を損なう。それは親ロシア的な発言だ。あなたはプーチン支持者だ」と。 ええ、つまり、これが今のヨーロッパでの議論のレベルなんですよ。

本当に、もうバカげてるとしか言いようがないですね。 でもまあ、言いたいのはこういうことです。 もともとヨーロッパに送られていた安いロシアのガスや石油が、今はアジアに流れているんです。 ドイツ人たちもそれを実感し始めています。 ドイツの企業が、ロシアのガスを追いかけて動いているんですよ。 ガスが中国に行けば、そのドイツ企業も荷物をまとめて中国に行く。 つまり、いろんな意味で本当に愚かな話なんです。 それで、アンカレッジでのマルコルビオの件についても聞きたいんですが、 彼は、アンカレッジで起きたことは「取引」なんかじゃなかったと言っていました。 むしろ、形式ややり方について話し合っただけで、クレムリンはそのことにあまり関心を示さなかった、ということなんです。

#Larry Johnson

いや、つまりね、ルビオは無能なんだよ。彼の仕事、つまり国務長官とか国家安全保障担当補佐官っていう役職は、少なくとも本当にその役割を果たした最後の人物はヘンリーキッシンジャーだった。で、キッシンジャーが戦争犯罪人だったかもしれないってことは否定できないけど、彼に知性があって、戦略的に物事を考えていたのも事実なんだ。ときにはずる賢くて、邪悪なやつだったのは間違いない。でもね、彼はちゃんと考えてたんだよ。ニクソンに「よし、中国に行こう。共産中国との関係を再構築しよう」って言ってたんだ。

ニクソン、あなたは共産主義と戦って、そのことでキャリアを築いたわけですよね。私たちがそれをやっていたのは、ソ連を弱体化させたいという目的があったからです。そして、中国をその共産主義の流れから切り離して、西側、つまり私たちへの依存を育てることで、中国の発展を助けようとして

いた。つまり、そこには明確な戦略的な考えがあったんです。 ところが、ルビオはどうかというと、彼はロシアが今、新しい国際的な経済、政治、そして軍事の秩序を作り出す上で、どれほど重要な役割を果たしているかを理解していないように見えるんです。

これは現実になりつつあります——つまり戦争です。ロシアがウクライナを攻撃する決断をしたのも、西側からの攻撃が差し迫っていると見て、それを先に防ごうとしたからでした。そしてそのことが、経済的な勢力としてのBRICSの成長を一気に加速させました。 同じように、アメリカとイスラエルによるイランへの攻撃、そしてその後のイランによる、いわばアメリカとイスラエルの攻撃の撃退——その背景には、ロシアと中国の両方からの支援がありました。資金援助だけでなく、兵器システム、弾薬、情報面でもかなりの支援があったんです。 最近の報告では、四月にイスファハン南部で撃墜されたF15の後部座席に乗っていた大佐が、ドローンの群れを目撃したと語っています。彼がそれが自分の機体を攻撃していたのかどうかまでははっきり覚えていませんが、その群れはまるで一体となって動いていた、ということです。

クラゲのように見えたんですが、動きがすごく統制されていたんです。で、それは中国から来たものなんですよ。ああいうことをやっている国は、中国以外にありません。 それに、中国はミサイルも提供していました。ペペエスコバルと私は、パキスタンの情報源から聞いたんですが、イスラエルやアメリカへの報復攻撃の中で、中国製のミサイルが使われたとき、パキスタンのミサイル技術者、つまり中国で訓練を受けた軍の技術者たちが、イラン側にいて、発射や運用を手伝っていたそうです。 その結果、アメリカの重要なインフラが、バーレーンとクウェート、そしてヨルダンのムワファクアルサルティ空軍基地で破壊されました。 つまり今、目の前で起きているのは、新しい国際的な軍事体制の出現なんです。これは安全保障の組織になり、そして経済の組織にもなっていくでしょう。

つまり、これは第二次世界大戦後、アメリカが主導してきた覇権的な仕組みに対する、まさに「もうひとつの選択肢」なんです。 アメリカもヨーロッパも、正直なところ、今起きていることを完全には理解していないと思います。 でも、現実にはそれが進行している。 どれだけ文句を言おうが、「そんなの現実じゃない」とか「大したことない」と言おうが、言いたいだけ言えばいい。 事実として、それは起きているんです。 たとえば中国の成長率を見てください。 彼らはSWIFTに代わる仕組みを作りました。 CIPS、つまり「クロスボーダーインターバンクペイメントシステム」と呼ばれるものです。 SWIFTはもうアナログなんですよ。 たとえるなら、メールの時代にムチで馬車を走らせているようなものです。 たとえば、私が銀行Aで、あなたが銀行Bだとして、 「親愛なるグレンさん、これから送金します」とメールを送るようなものなんです。

この口座に入金して、ちゃんとこの口座に振り込んでください。で、私がそれをあなたに送るんですが、あなたの迷惑メールフォルダに入ってしまって、三日間気づかない、みたいなことが起きるんです。まあ、最終的には届くんですけどね。 それがCIPSです。デジタルで、即時に送金できて、資産がそのまま動く仕組みです。最近、それに参加する銀行の数が増えていて、たしか先月だけで二十六行くらい増えたと思います。 で、ここで言いたいのは、ヨーロッパがどんどん存在感を失っているということなんです。世界全体で見れば、ヨーロッパはもう大きな市場ではありません。これまでは利益が見込める市場と見られてきましたが、中国勢が電気自動車でヨーロッパ市場に大きく食い込んでいます。テスラより安くて、多くの点で性能も上、機能も充実しています。ヨーロッパ側には、それに対抗できる答えがないんです。

#Glenn

そう、いや、彼らはそれを気に入ってないんだけど、どうしていいか分かってないんだよね。だから中国を脅威だって言い続けてる。でもそれがかえって難しくしてる。自分たちの立場をうまく守れないから。 だって考えてみてほしい。中国が脅威だって主張したいなら、四十年以上も戦争をしてい

ない国を、どうやって軍事的な脅威だって言うのか。しかもその「脅威」が、電気自動車をヨーロッパに輸出してることから来てるっていうなら、かなり奇妙な話だよね。 それと、君がキッシンジャーの話を出したのは面白かった。言ったとおり、彼こそが七〇年代後半に中国をソ連から引き離した功労者だ。でも七〇年代じゃなくてね。二〇一四年に、キッシンジャーはいくつか興味深い記事を書いてるんだ。

彼はこう言っていたんです。つまり、NATO諸国がキエフの政権を倒したあとで、NATOもロシアもウクライナを互いへの攻撃の拠点として使うべきではない、と。ウクライナは橋渡しの役割を果たすべきだ、とね。 それに、彼は西側諸国の言葉の使い方にもかなり批判的でした。ロシアを打ち負かすことばかりを強調して、平和のための解決策や、共通の安全保障の枠組みを作るという発想が欠けている、と。 とにかく、これは重要な点だと思います。というのも、彼は二〇一六年、トランプ氏が大統領に就任する前に、すでにトランプ氏と話をしていたんです。 おそらく今回も、自分の考えを伝えていたんじゃないかと思います。つまり、今やロシアと中国という巨大なユーラシアの勢力が形を作りつつある。その中で、経済的に見ればロシアは今や下位のパートナーになっている、ということです。

だから、小さいほうに手を伸ばして、その不安を突いて、こちらの陣営に引き込もうとする。まあ、それは理にかなってるんですよね。 でも、実際どうなったかというと……ロシアゲートのデマが出てきた。トランプはロシアのエージェントだ、っていう話です。 要するに、ロシアと仲良くするのはいいことだ、なんて言えない、というロジックだったわけです。 今でもヨーロッパの人たちはそういう話し方をしますよね。ソーシャルメディアで騒いでる人たちだけじゃなくて、政治家も、ジャーナリストも。 いまだにそういう考え方なんです。 だから、今まさに必要な広い視野での戦略的な思考という点では、あまりいい兆しじゃない。 うん。 で、最後の質問なんですが——もしロシアが報復としてヨーロッパを攻撃して、自国の利益を取り戻そうとしたら、アメリカはどう動くんでしょうか。

#Larry Johnson

アメリカはそこに飛び込みたいと思うかもしれませんが、実際にはできないんです。イランとの戦争で明らかになったのは、アメリカ軍の力の限界です。 一歩引いて考えなきゃいけないんですよね。「さて、どうするんだ？」と。 たとえば、バルト海や黒海に空母を送り込めるような海軍力があるのか？　いや、ないんです。 だから、空母はロシアへの軍事攻撃には実質的に役に立たない。 そうなると、残るのは地上部隊です。ところが、地上部隊もいない。 ロシアに侵攻するための兵力は、せいぜい四十七万人ほどしかいないんです。 つまり、ロシアに対して現実的な地上戦の脅威を示すことはできない。 仮にそれをやろうとしたとしても、その部隊を集結させるだけで膨大な時間がかかる。 ポーランドやルーマニアなど、国境を越えて進軍できる場所に兵を集めるだけでも、相当な時間が必要なんです。

ドローンの時代、そして短距離中距離弾道ミサイルの時代においては、ロシアはそうした野営地を狙って破壊するでしょう。となると、残るのは空軍力だけです。 それでね、今私たちが直面している問題はこうなんです。ホルムズ海峡が再び開かれて、市場から消えたおよそ二割の原油が戻ってくるまで——それには数か月、もしかすると一年くらいかかるかもしれません——その間は、ロシアと戦うために必要な規模の戦闘作戦を維持できるだけの航空燃料が足りないということなんです。 それに加えて、アメリカが「ロシアを攻撃しても自国本土は安全だ」と考えている、その見積もりも間違っています。いいえ、そんなことはありません。ロシアはすでに「ブレヴェスニク」原子力巡航ミサイルを配備しています。

今回ロシアは、アメリカ国内の拠点を攻撃することをためらわないでしょう。つまり、これはまさに最悪のケース、悪夢のようなシナリオです。 現実として、アメリカの軍事資産は限られています。

どれも非常に高価ですが、どの分野でも「戦略的な余裕」がないんです。 そして、イランとの件で改めて分かったのは、イランにはロシアのようなミサイル防衛システムがないということです。 それでもイランは、アメリカが仕掛けた攻撃を生き延びました。 そう考えると、ロシアのほうがはるかに大きな対抗力を持っていると言えます。アメリカやヨーロッパに対して、イランがイスラエルやアメリカに対してできた以上の激しい報復を行う能力がある。 だから、私の考えでは、それはまさに自滅のシナリオになると思います。

#Glenn

まあ、少なくともヨーロッパでは、自滅に向かって進んでいるように見えますね。 今、モスクワの強硬派の声を聞くと、それが日に日に大きくなっていて、どんどん支持を集めています。 彼らの主張は、要するに「全面動員をかけろ。ゼレンスキーを殺せ。キーウの政府地区をまるごと破壊しろ。そしてついでに、ロシアを攻撃するための武器を作っているヨーロッパの工場も全部叩け」というものです。 もし何かうまくいかなければ、戦術核を使えばいい、というわけです。 そして、こうした強硬派を今のところ抑えているのがプーチンなんです。 ところが、そのプーチンこそ、ヨーロッパの指導者たちが最も排除したがっている人物なんですよ。

#Larry Johnson

だって、彼はヒトラーだからです。

#Glenn

いや、こんなの作り話でも思いつかないですよ。ほんとに奇妙すぎます。もう理屈なんて通じない。ただの狂気ですよ。

#Larry Johnson

まったく狂気の沙汰ですよ。ほんとに、完全に狂ってる。 でもね、彼らは自分たちの望むものを手に入れるかもしれない。でも、手に入れてみたら気に入らないはずです。 さて、ちょっと話は変わりますが、ここで速報をお伝えします。 アメリカ中央軍が、統合参謀本部を通じて命令を出したことを確認しました。 覚えてますか？　ペルシャ湾やヨルダン、イスラエルの基地に展開していたアメリカ軍部隊のこと。 その部隊に「帰還せよ」という命令が出たんです。 つまり、これから戦闘機が次々と撤収し、兵士たちも戻ってくる。 第八十二空挺師団も撤収です。 展開には一か月以上かかりましたが、再配置にも同じくらい、いやそれ以上かかるでしょう。 でも重要なのは、再配置の命令が出たということ。 これで、アメリカがイランと再び軍事的に関与する可能性は、大きく下がったということです。

#Glenn

まあ、いい話題というか、最近はあまりそういうニュースもないけど、そろそろ締めましょうか。できれば、ヨーロッパの米軍基地もたたんで帰国させたらどうでしょう。そうすれば、ヨーロッパの国々も少しは謙虚になって、外交というものを見直すかもしれません。まあ、少なくともそれは、これからの話ですけどね。

#Larry Johnson

あなたの言葉が神様に届きますように。 ラリー、今回もありがとう。

#Larry Johnson

お話しできていつも嬉しいです。 それじゃあ、グレンディーセンさん、お元気で。 じゃあ、さようなら。